

佐藤堅司著

孫子の思想史的研究

有馬成甫

「孫子の思想史的研究」は、佐藤堅司博士の学位論文で、近時異色のものであると思う。

それが兵家の書であるという点に於て、平和風の吹きまぐつてゐる当今、最早それは紙燼に委せられてもよいものではないかと思われているかもしれないし、或は、それは既に西歴紀元以前に作られた書であるから、古典として架塵の中に埋もれていても差支ないのではないかと思われているかもしれない。然し孫子は古来最もよく読まれたものであるだけに、その読者層は時代を超越して拡がつていて、如何に世想は変わり、時代は移つても、その時々々の思想と風潮とは、常に新たな意味と教訓とをこの書から掬みとることが出来るものであるから、言わば孫子は、万年ベストセラーの一であるということが出来る。従つてこの研究には新たな意味と重要さがあると思う。

その場合、佐藤博士の研究は絶好の手引きとして色々のことを教えて呉れる。著者は、大正八年「大正公論」に「兵学者としての吉備真備」と題して、真備の「孫子」移入と、孫子兵法を利用した恵美押勝の乱鎮定を扱い、又特に三兵戦術に興味を抱いて、戦前、日本武学研究所を起し、「日本武学大系」三〇巻を刊行している兵学研究家であるが、先ず第二章の成立考に於て博士は孫

子の著者を春秋時代の孫武であるとし、戦国時代の孫臏がこれを校定したものであらうと推断しておらるる。

また漢書藝文志に呉孫子兵法八十二篇図九卷、とあるを分類して六種とし(一)十三篇(二)問答(三)八陣図(四)雜占(五)牝八變図(六)三十二星經とし、その内の孫子十三篇は、既に司馬遷の記した呉王の語の中に見らるるから、その後の改竄は行われていないと論断されている。

博士の研究の内でも最重要で、特記すべきことは古文孫子の全文と、これを注釈した北条氏長の「孫子外伝」を揚げられたことである。

この孫子二巻は正しく吉備真備が天平六年(七三四)唐から携えて帰朝したものであると推定し、続日本紀天平七年四月真備が将来した典籍・楽器・武具を天皇に献じた目録の内には、「孫子」の名は見えないけれども、同書天平宝字四年(七六〇)十一月の条には大宰府に於て、吉備真備をして諸葛亮八陣・孫子九地及結營向背を習わしむとあり、また寛平三年(八九一)に藤原佐世が編集した「日本国見在書目録」には孫子二巻の名が見えているから、これは正しく吉備真備が将来したもので、北条氏長が註記した古文孫子二巻は、それに相違なく、それ以外には考えられないと断定して居らるる。この点に対しては同博士に萬腔の敬意を表する次第である。

氏長は孫子外伝序文の中に余弱冠より兵経に志して二十余年、孫子の義に於て穩かならざるところがあつたので、諸書を考引し

て之が訳を尋ねるも遂に得られなかつたが、古文孫子を得て初めて通会するところがあつた、と述べている。

氏長はこの書が禁秘の書であつて、その出所を言うことが出来ないからといつて、之を秘したのであるが、幕末に至つてこの書の全文が、仙台藩桜田廼の家に伝わつていたものによつて上版された。

佐藤博士がこの古文孫子全文を、氏長の註釈書と共に併せてこの研究に載せられていることは本書の圧巻であると思う。

この古文孫子は独りわが国に伝存して、中国には既に逸失し、魏武・李靖の輩も之を見ていない珍籍であり、孫子の真本であることは疑いなしと氏長もいつている。之を魏武註孫子と比較するに、九地篇、九變篇に異同があるのみならず、計篇の兵者国之大事也と、也があつて一句を結んでいる点などから考えると今文孫子のそれは重大な錯簡であると、指摘されている。

それで古文が知られた以上、魏武註本は捨て去つて、孫子といえはこの二巻本を底本として研究されなければならないと私は思う。この点に関して佐藤博士の研究は些か物足りないものであるが古文孫子の全文を出していただいたということだけでも高い評価に値することは茲に繰り返して讃辭を述べる次第である。

これから孫子を読むと志ざす人の爲めには、佐藤博士の研究は親切丁寧の手引である。第一編序説に於て成立考等文献的研究を行い、第二編「十三篇の思想研究」に於て計（始計）篇が孫子の総括的眼目であつて、間（用間）篇と呼応して首尾完結するも

のである旨を述べ、兵者国之大事也という句の「兵」の意味を、古来多くの人々によつて解釈せられた例をあげて、私見を述べて居らる。要するに「兵」の意味が孫子の性格を決定する程の重要さを持つてゐるものではあるが、これは時と場合と、またその人々の説かんとする方便によつて、種々の意味があり、広汎な含蓄を持つてゐる、と解すべきものであることは明らかである。この故にこそ、孫子は単に戦争哲学書であるばかりでなく政治哲学書でもあり、また商売をする人にも、事業家にも良き処世の途を示すものとされてきたと思う。

この第二編に於ける各章は、孫子各編につき一通りの説明をなし読者の参考に資せられている。

第三篇「日本に於ける孫子研究の思想的考察」は本書の眼目ともいふべき章であつて、(一)孫子研究のあけぼの、(二)室町時代以降に於ける孫子研究、(三)江戸時代前期に於ける孫子研究、(四)江戸時代後期に於ける孫子研究、(五)明治以降に於ける孫子研究、の五に分ち各時代に於ける代表的な人物とその見解とを紹介してある。

これによればその時代時代の情勢により、または、之を読む人々の教養と立場とによつて、孫子の執れの点に重点を置くべきか、が異り、また字句の解釈にも差があつて興味深く思われるのである。その一例として佐久間象山の見解を挙げてみよう。

象山は高島流砲術を江川垣庵に受け、五ヶ月にして免許状を受ける、蘭学を学び、次で自ら西洋真伝の門戸を開き、多くの弟

子を育成したが、彼はオランダ語の原書を読み、タクチーキや、クラウゼウィッツまでも「その大略を相弁じ」と称し、この見地から孫子を次のように評している。

その書たる、空言にして事実なきもの過半、未だ以て兵を治す可からず；而して世徒その文に眩せられて、其實を求めず、万口一致、称して兵法となして疑はず、吾甚だ之を怪しむ。といつてゐる。

これは高島秋帆出でて、西洋砲術の教を開き、それが流行したので、大田南畝が唱えた、一たび西洋より火技を伝え、孫呉韜畧、尽く陳腐、などその頃流行した見解に象山も同調したのではなからうか。孫子を以て西洋兵術に比較する議論の出現したことも、歴史の歩みを物語るものである。

そうして従来、孫子といえは魏武註孫子の外はあまり知られていなかった古文孫子が、佐藤博士の研究によつて世に顯われ、その全文がこの書に掲載せられ、われわれが容易にこれを読み得るようになった以上、而かもこの両者を比較して、そこに雲泥の差を認め得るに至つた以上、今日以後の孫子研究は必ずやこの古文に拠らなければならないと思う。

そうして、近時の世想に於て、新たな意義と価値とを、孫子に見出さんとする新研究が、魏武註本を捨て去つて、中国に於ては既に逸失して伝わらず、独りわが国に伝承したこの古文孫子を中心として、起らなければならないと信ずる。それにはこの佐藤堅司博士の研究書は革命的な時代にふさわしい手引書であると認

めらるる。

(東京、風間書房、昭和三十七年、五三六頁)

西嶋定生著

中国古代帝国の形成と構造

—二十等爵制の研究—

栗原朋信

本書は、著者西嶋定生氏が、中国古代史に関し、今日までに発表した創見に富む幾多の論考に反省を加えつゝ、秦漢帝国の構造的特質がいかなるものであつたか、また、それが秦漢時代という歴史的に限定された時代において出現したのは、いかなる事情によるものであつたか、という問題を、国家構造の内面的な解明によつて論究したものである。以下に記す本書の内容は、もとより評者なりに理解したものであることを、あらかじめおことわりしよう。

さて、序章「中国古代社会の構造的特質に関する問題点」においては、まず秦漢帝国の成立事情とその国家構造についての学説史的展望を記し、秦漢帝国は皇帝による個人身身的支配体制であることを強調し、これを前提として著者は研究をはじめめる。